

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月7日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320007

研究課題名（和文） 近現代哲学における虚軸としてのスピノザ

研究課題名（英文） Spinoza: the imaginary axis of modern philosophy

研究代表者

上野 修 (UENO OSAMU)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：10184946

研究成果の概要（和文）：スピノザの哲学はアカデミックな学派の形をとらず、いわば近現代哲学の形成を貫く「虚軸」のように機能してきたのではないか。本研究はこうした仮説のもと、スピノザの特異なプレゼンスを近代から現代にわたって浮き彫りにし、従来の哲学史の見直しをも可能とする地歩を築くことができた。

研究成果の概要（英文）：The influence of Spinoza's thought upon the development of modern philosophy has been brought to light by tracing his latent presence throughout the intellectual history in Europe from the eighteenth century up to today.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2011年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2012年度	2,600,000	780,000	3,380,000
年度			
年度			
総計	7,900,000	2,370,000	10,270,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：西洋哲学・スピノザ

1. 研究開始当初の背景

従来の哲学史研究は、ある哲学者の学説がいかなる問題意識のもとで形成され、いかにしてある時代に支配力を持ち、どのように批判と継承がなされていったかを問題にする。われわれはデカルト、カント、ヘーゲルのような支配的な学説の批判・継承の歴史を考えることに慣れている。しかしこういう視点でスピノザのインパクトを捉えることはできないと研究代表者は久しく感じていた。そもそも学説のアカデミックな継承・発展を言うのが難しい。実際スピノザ学派というものは形成されず大学でスピノザを講じることすら憚られる事態が西洋では久しく続いた。に

もかかわらず、近現代哲学の形成の重大な局面でしばしばスピノザが引き合いに出されるという事実がある。近現代哲学の形成を縦断するスピノザのプレゼンスは、従来の学説史的な手法ではうまく捉えられない。近現代哲学史の全域にわたるスピノザのプレゼンスを綿密に描き出した研究は内外ともにまだない状態であった。

研究代表者は、スピノザ協会および大阪大学の同僚たちと研究交流する中で、スピノザを一つの学説としてではなく、西洋の近現代哲学形成に働いてきたひとつの特殊な影響作用力として研究してみようというアイデアに逢着した。

2. 研究の目的

西洋近現代哲学思想の形成にスピノザ思想が与えた影響について、影響作用史的視点から明らかにする。「神即自然」の哲学者スピノザ(1632-1677)の登場はヨーロッパを震撼させ、彼の名はひとつの蹟きとなった。彼の著作は禁書となり、その後スピノザ学派のようなものが大学の中で形成されることもなかった。「スピノザ主義」という呼称は学派の理念や方法を意味するよりは、むしろ何らかの忌避と抵抗、あるいは畏怖を交えた魅惑を伴うある種のアノマリーの符牒として機能してきたのである。このようなスピノザ哲学の特異な影響作用力に注目し、近現代哲学思想の形成史を縦断するいわば「虚の軸」としてスピノザのプレゼンスを明らかにする。これが本研究の目的である。

3. 研究の方法

- (1)3年にわたって年に2回、計6回の公開研究会ないしシンポジウムを開く。
- (2)加えて、2年目からは海外からの研究者を招いて公開講演会を数回開く。
- (3)いずれについてもさまざまな研究会組織との緊密な連携をはかり、「虚軸としてのスピノザ」という大テーマのもとに多くの研究者を巻き込む一連のシリーズとして開催する。
- (4)特に最終年度の最後の研究会は公開シンポジウムとし、共同研究の存在を広く知らしめる。

4. 研究成果

第1回研究会「十七世紀とスピノザの傷痕」(スピノザ協会と共催、2010年11月27日(土) 東京大学駒場キャンパス)ではスピノザと同時代の哲学者マルブランシュ、ピエール・ベール、ジョン・トーランドらのスピノザ論駁を検討した。彼らの論駁はスピノザ哲学との格闘というよりはむしろ、神学政治論的論争状況における自説の展開のための方便という性格が強いことが明らかとなった。発表は次のとおり：渡辺博之 マルブランシュのスピノザ批判 / 三井吉俊 ピエール・ベールのスピノザ反駁について / 大橋完太郎 スピノザ哲学への唯物論的批判：ジョン・トーランド『セレナへの手紙』を中心に

第2回研究会「ライプニッツとスピノザ、十八世紀へ」(日本ライプニッツ協会・スピノザ協会との共催 011年3月5日・6日 大阪大学文学部)ではライプニッツのスピノザ哲学受容を検討した。初期思想形成におけるスピノザ哲学への傾倒と離反という強いアンビバレンツが明らかとなった。キリスト教護教論というイデオロギー的対立にとどまら

ない形而上学上の深刻な対決をライプニッツが強いられていたことが浮かび上がってきた。発表と提題は次のとおり：清水洋貴 ライプニッツとスピノザの接触と分岐—「観念」をめぐる— / 橋本由美子 ライプニッツにおける所有一ドゥルーズ『褻』に定位して / 町田一 ライプニッツの聖書解釈論 / 松田毅 ライプニッツはスピノザと出会う前からライプニッツだったのか / 鈴木泉 ライプニッツはスピノザ哲学の何に惹かれ、何を恐れたのか？

第3回研究会「ドイツ古典哲学におけるスピノザ問題」(スピノザ協会と共催、2011年7月16日大阪大学豊中キャンパス)では、神学者からの合理主義批判をかわすためのヴォルフによるスピノザ批判、シェリングによるスピノザ的実体の「自我」化、ヘーゲルによるその「主体」化の過程が明らかにされ、スピノザに対するドイツ古典哲学の拒絶と憧憬がないまぜとなったアンビバレントなスタンスが具体的に見えてきた。スピノザにおける論理的冷徹への違和、弁証法的な自己関係性や否定性の不在への違和がドイツ古典哲学を大きく規定し限界づけていることが確認された。発表は次のとおり：平尾昌宏 クリスマン・ヴォルフのスピノザ主義理解 / 松山壽一 自由と必然またはシェリングとスピノザ / 栗原隆 スピノザにおける無限性とヘーゲルにおける「自己関係」。

第4・5回研究会として Wiep van Bunge 教授(ロッテルダム)を招き講演と討議を行なった(スピノザ協会・哲学会との共催、2011年10月8日大阪大学豊中キャンパス、10月10日東京大学本郷キャンパス)。講演題目は「スピノザとコレギアント」、「スピノザとオランダ」。スピノザの民主的発想の背景となったコレギアント運動、およびオランダにとってのスピノザの歴史的意義について貴重な知見を得た。

第6・7回研究会として Han van Ruler 教授(ロッテルダム)を招き講演と討議を行なった(スピノザ協会と共催、2012年2月29日東京大学駒場キャンパス、3月10日大阪大学豊中キャンパス)。発表題目は「恩寵か徳か？—カルヴァン派デカルト主義の観点から見るスピノザの『エチカ』」、「スアレスを装って—スコラ哲学の実体論とスピノザの神」。スピノザ哲学の意外に宗教的な側面が明らかにされた。

第8回研究会「現代思想のトラウマとしてのスピノザ」(5月19日・20日大阪大学)では、現代思想のスピノザに対する緊張関係が思想家に即して明らかとなった。発表は次の通

り：佐藤貴史 ローゼンツヴァイクの〈新しい思考〉とスピノザ／細見和之 スピノザの「自己保存」と『啓蒙の弁証法』／古荘真敬 ハイデガーとスピノザ—近さと遠さ／合田正人 二つのエチカ？—レヴィナスのスピノザ解釈とその諸問題。

第9回研究会ザントカウレン教授講演会(11月4日大阪大学)。「ヤコービの「スピノザとアンチ・スピノザ」」。スピノザ哲学の本質を受け止めながらもアンチを唱える、ヤコービの逆説的な立場が問題となった。

第10回研究会「カントにおけるスピノザ問題」(11月24日大阪大学)では、超越論的哲学はスピノザ主義であるという文言について討議がなされた。言及される「超越論的哲学」がカント自身のそれを指すのか否かについては係争問題として残った。発表は次の通り：福谷茂「カントにおけるスピノザ問題」・加藤泰史(コメンテーター)。

総括シンポジウム「近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」(11月25日大阪大学)では、スピノザ受容におけるライブニッツの介在の重要性があらためて確認された。シンポジウムの構成は次の通り：【導入】上野修 スピノザあるいは石像の招待／【第一部】十七世紀と現代—ライブニッツ=スピノザ問題の射程—現代哲学思想とスピノザの影：松田毅 ライブニッツ・スピノザ関係再考?世界の不透明性をめぐって／須藤訓任 西洋近代思想の裏潮流の源泉としてのスピノザ／高木久夫 中世の葛藤と近代の偏見?ユダヤ思想におけるスピノザ受容／合田正人 レヴィナスとスピノザ(書面参加)。【第二部】ドイツ観念論—汎神論論争とその後：栗原隆 スピノザにおける無限性とヘーゲルにおける自己関係性／入江幸男 ドイツ観念論とスピノザの関係／加藤泰史 カントとスピノザ(主義)。

第11・12回研究会 ジャン＝クレ・マルタン講演会(2月27日大阪大学・3月1日明治大学)。「様態とは何か—ドゥルーズの仕事におけるスピノザの特異性」／「〈エチカ〉という語は何を意味するのか」。スピノザのフランス的文脈における現代性が明らかにされた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計23件)

- ①. 合田 正人, 大海の漂流物のように?? レヴィナスの「シオニズム」をめぐって,

国際シンポジウム『ユダヤ思想における伝統の理解とその展開』議事録、同志社大学一神教学際研究センター、エルサレム・ヘブライ大学人文学部、査読なし、1, 2013, 64-73

- ②. 高木 久夫, スピノザ宗教批判の内なる当惑すべき残響??『神学政治論』における異形のマイモニデス主義、頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「多文化共生時代における一神教コミュニティ間の相互作用と対話」の国際シンポジウム報告書、査読なし、NA, 2013, 56-62
- ③. 上野 修, ヴェイユとスピノザ—酷薄の哲学のための覚書、季報唯物論研究、査読なし、No. 121, 2012, 10-15
- ④. 栗原 隆, 自然と生命—シェリング『自然哲学の理念』に寄せて—、東北哲学会年報、査読なし、No. 28, 2012, 93-108
- ⑤. 栗原 隆, スピノザにおける無限性とヘーゲルにおける自己関係、ヘーゲル哲学研究、査読なし、Vol. 18, 2012, 62-76
- ⑥. 入江 幸男, 意味の全体論とフィヒテの知識学、フィヒテ研究、査読なし、第20号, 2012, 17-30
- ⑦. IRIE YUKIO, Die Moeglichkeit des kollektiven Wissens bei Fichte - Kiritik des " idealistischen Individualismus " und das " Allgemeine Denken " in " Die Thatsachen des Bewusstseyns " (1810), Fichtes spaete Wissenschaftslehre, Verlag der Russische Cristliche Hunaitaere Academy, 査読なし, 1, 2012, 272-282
- ⑧. 加藤 泰史, 評論 三, ヘーゲル哲学研究, 査読なし, vol. 18, 2012, 173-177
- ⑨. 鈴木 泉, 大地の動揺可能性と身体の基礎的構造—問いの素描, 哲学, 査読なし, no. 64, 2012, 25-44
- ⑩. 上野 修, 決定論の彼方、自由としての必然—スピノザの場合(後日考を付す), 西日本哲学会年報, 査読なし, No. 19, 2011, pp. 145-160
- ⑪. 合田 正人, 「スピノザ主義の対極にて」?, 文化継承学論集, 査読あり, 8号, 2011, 85-92,
- ⑫. 松田 毅, ライブニッツはスピノザをどう読んだか—『神学・政治論』・「自然主義」・ライブニッツ—, スピノザーナ, 査読なし, 11, 2011, pp. 65-86
- ⑬. 合田 正人, 欲望の倫理—スピノザを廻るラカンとレヴィナス, スピノザーナ, 査読なし, 11, 2011, 123-143
- ⑭. Yukio IRIE, Eine Aporie der Fichteschen Wissenschaftslehre - Einige Schwierigkeiten mit der intelletuellen Anschauung ,

Fichte-Studien, 査読あり, 35, 2010, 329-337

- ⑮. Tsuyoshi MATSUDA, Leibniz on Causation: From his definition of cause as 'coinferens', Leibniz und die Entstehung der Modernität. Studia Leibnitiana Sonderheft, 査読あり, 37, 2010, 101-110
- ⑯. 松田 毅, ライプニッツ原因概念の現代的意義—D. ルイスの分析を手がかりに, ライプニッツ研究, 査読あり, 1, 2010, 115-134

〔学会発表〕(計 14 件)

- ①. 入江 幸男, 徹底的に純粋な観念論の限界—フィヒテが知の外部に絶対者を想定する理由—, 同志社大学文学部哲学科パネルディスカッション(招待講演), 2013年03月02日~2013年03月02日, 同志社大学
- ②. 入江 幸男, 『意識の事実』と知識学の関係—あるいは、アポステリオリな知とアプリオリな知の関係, 日本フィヒテ協会大会シンポジウム「ベルリン期における知識学への準備講義」(招待講演), 2012年11月12日~2012年11月12日, 神戸大学
- ③. IRIE YUKIO, Semantic Holism and Fichte's Wissenschaftslehre' in The Inaugural Conference For Kant, Fichte, and The Legacy of German Idealism, The VIII International Fichte Kongress(招待講演), 2012年09月19日~2012年09月22日, Bologna University, ドイツ
- ④. Goda Masato, La tache du traducteur, Colloque sur Autrement qu'etre ou au-delà de l'essence, organise par Paris IV(招待講演), 2012年09月06日~2012年09月06日, ENS a Paris, フランス
- ⑤. 上野 修, Okay, I'll be Part of This World—可能な世界とスピノザの自由, ICU 哲学研究会(招待講演), 2011年11月23日, 国際基督教大学(東京)
- ⑥. MATSUDA Tsuyoshi, A Leibnizian Mereological Consideration About Geometrical Beings, Bodies and Monads, IX. Internationaler Leibniz-Kongreß. Natur und Subjekt(招待講演), 2011年9月29日, ハノーバー大学(ドイツ)
- ⑦. 松田 毅, ライプニッツはスピノザと出会う前からライプニッツだったのか, スピノザ協会第57回研究会, 2011年3月6日, 大阪大学
- ⑧. 鈴木 泉, ライプニッツはスピノザ哲学の何に惹かれ、何を恐れたのか?, スピ

ノザ協会第57回研究会, 2011年3月6日, 大阪大学

- ⑨. 上野 修, 決定論の彼方、自由としての必然—スピノザの場合, 西日本哲学会第61回大会シンポジウム(招待講演), 2010年12月5日, 鹿児島大学
- ⑩. 合田 正人, 欲望の倫理—スピノザを廻るラカンとレヴィナス, スピノザ協会第21回総会講演(招待講演), 2010年5月8日, 明治学院大学白金校舎

〔図書〕(計 15 件)

- ①. 上野 修, 講談社, 哲学者たちのワンダ—ランド—様相の十七世紀, 近刊
- ②. 栗原 隆(編), ナカニシヤ出版, 感情と表象の生まれるところ, 2013, 234
- ③. 上野 修(共著), 講談社, 西洋哲学史 III 「ポスト・モダン」のまえに, 2012, 195-251
- ④. 上野 修(共著), 春風社, 哲学の挑戦, 2012, 39-70
- ⑤. 上野 修(共著), 法政大学出版局, ライプニッツ読本, 2012, 208-218
- ⑥. 栗原 隆(編), ナカニシヤ書店, 世界の感覚と生の気分, 2012, 290頁
- ⑦. 上野 修, 講談社, デカルト、ホッブズ、スピノザ—哲学する十七世紀, 2011, 261
- ⑧. 栗原 隆(編), 東北大学出版会, 共感と感応—人間学の新たな地平 2011, 381頁
- ⑨. 合田 正人, NHK出版, アラン『幸福論』, 2011, 87
- ⑩. 須藤 訓任, 大阪大学出版会, ニーチェの歴史思想—物語・発生史・系譜学, 2011, 431
- ⑪. 栗原 隆, 未来社, ドイツ観念論からヘーゲルへ, 2011, 281
- ⑫. 須藤 訓任(共著), 河出書房新社, KAWADE 道の手帖—ニーチェ入門, 2010, 17-24

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy/spinoza/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上野 修 (UENO OSAMU)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号: 10184946

(2) 研究分担者

栗原 隆 (KURIHARA TAKASHI)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号: 30170088

須藤 訓任 (SUTO NORIHIDE)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：50171278

鈴木 泉 (SZUKI IZUMI)
東京大学・人文社会系研究科・准教授
研究者番号：50235933

合田 正人 (GODA MASATO)
明治大学・文学部・教授
研究者番号：60170445

入江 幸男 (IRIE YUKIO)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：70160075

松田 毅 (MATSUDA TSUYOSHI)
神戸大学・その他の研究科・教授
研究者番号：70222304

加藤 泰史 (KATO YASUSHI)
一橋大学・社会(科)学研究科・教授
研究者番号：90183780

高木 久夫 (TAKAGI HISAO)
明治学院大学・教養部・准教授
研究者番号：90510496

(3) 連携研究者

平尾 昌宏 (HIRAO MASAHIRO)
研究者番号：90536583

手島 勲矢 (TESHIMA ISAYA)
研究者番号：80330140

朝倉 友海 (ASAKURA TOMOMI)
研究者番号：30572226